

株主のみなさまへ

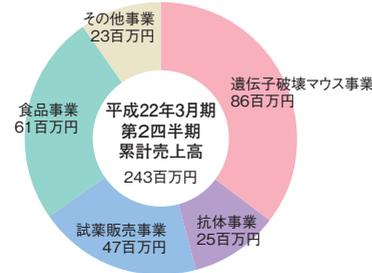
# 第12期中間報告書

2009年4月1日～2009年9月30日

株式会社トランスジェニック 証券コード2342



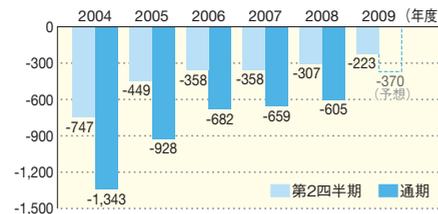
▼売上高構成



▼売上高 (単位:百万円)



▼経常損益 (単位:百万円)



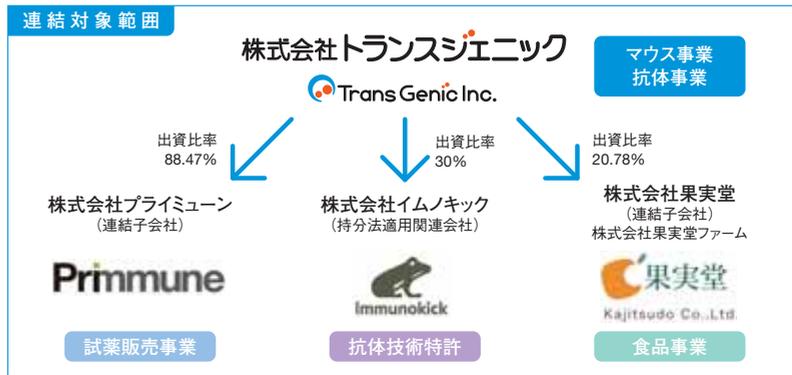
▼当期純損益 (単位:百万円)



概況

6年ぶりの増収および経常損益ベースで6年連続赤字幅縮小。  
 当社は、当第2四半期連結累計期間において、収益基盤の確立を目指した事業計画の変更により、研究テーマの絞り込み、業務の効率化および全社的なコスト削減を行いました。その結果、当第2四半期連結累計期間における当社グループの業績は、売上高243百万円(前年同期134百万円)で81%増加となり、6年ぶりの増収となりました。損益については、営業損失215百万円(前年同期312百万円)、経常損失223百万円(前年同期307百万円)、四半期純損失189百万円(前年同期313百万円)といずれも改善し、6年連続の赤字幅縮小となりました。  
 セグメント別業績状況は、遺伝子破壊マウス事業が遺伝子情報の大口受注により86百万円(前年同期比156%)となりました。抗体事業は、製品開発に注力したことから、25百万円(前年同期比40.4%減)にとどまりました。試薬販売事業においては、販売製品数25,000アイテムとラインナップを充実させたことが反映し、47百万円(前年同期比170.3%)と大きく増加しました。また、その他事業は、創薬支援事業の大口受注により、23百万円(前年同期比167%)と好調に推移しました。新規事業セグメントに加わりました食品事業は、水害による生産量減少もございましたが、61百万円となり、大きく売上高増加に寄与いたしました。

<p>遺伝子破壊マウス事業</p> <p>好調に推移</p>	<p>抗体事業</p> <p>自社製品開発への先行投資の影響有</p>	<p>試薬販売事業</p> <p>好調に推移</p>	<p>食品事業</p> <p>天候の影響有</p>	<p>その他事業</p> <p>好調に推移</p>
--------------------------------	-------------------------------------	----------------------------	---------------------------	---------------------------



株主の皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。平素は格別のご高配を賜り厚く御礼申し上げます。さて、第12期の中間報告書をお届けするにあたり、ご挨拶申し上げます。

当社は、「生命資源の開発を通じて世界の人々の健康と豊かな暮らしの実現に貢献する」ことを経営の根幹として、その実現に向けて日々挑戦を続けております。また、当事業年度においては、マウス事業や抗体事業等の創薬支援領域に加え、食品事業を通して予防医学領域へ取り組むことを検討しております。

当社はライフサイエンス研究に本当に求められる研究ツールを提供しつづけることで、企業価値の持続的向上を図り、ステークホルダーの皆様へ指示される企業活動に邁進してまいります。

株主のみなさまにおかれましては、こうした当社の姿勢に何卒ご理解をいただき、なお一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2009年12月 代表取締役社長 山村 研一



Profile 略歴

1948年 10月 10日生まれ	2002年 8月 株式会社トランスジェニック 取締役
1986年 4月 熊本大学医学部附属遺伝医学研究施設 教授	2009年 11月 熊本大学 副学長
	4月 熊本大学 理事・副学長 現任
2000年 4月 熊本大学発症医学研究センター(現発生医学研究所) 教授 現任	熊本大学生命資源研究・支援センター教授 現任 株式会社トランスジェニック 代表取締役社長 現任

Contents 目次

連結決算ハイライト	1	事業のご紹介	5	会社概要	11
ご挨拶	2	研究開発のご紹介	7	株式の状況	11
トップインタビュー	3	連結財務諸表	10	株主メモ	11
				IRからのお知らせ	11

## Q1 トランスジェニック社の課題として『収益基盤の確立と研究開発の推進』に取り組まれています、その進捗状況についてお聞かせください。

当第2四半期中の研究開発は、各事業での作業工程の見直しなど業務の効率化を図り、利益率の向上に取り組みました。特に抗体事業においては、作業工程の見直しにより、作業期間を50%短縮させることに成功しました。また、GANP<sup>®</sup>マウス技術を最大限に活用し、成功事例の蓄積を目標としてまいりました。その成果として国立がんセンターとの共同研究の中で生まれた「膵がんマーカーに対する抗体」の特許が2009年6月に成立しました。さらに、当社の抗体作製の技術力が認知されたことにより、国立国際医療センターとの「新型インフルエンザ診断薬の開発」に関する共同研究もスタートしました。このように、GANP<sup>®</sup>マウス技術のブランドが確立されつつあり、今後このブランド力が付加価値となり、市場競争での優位性につながるものと期待しています。

次に、全社的なコスト削減については、全てのプロジェクトにかかるコストの見直しおよび役員報酬カットを行い、平成22年3月期に約2億円のコスト削減達成の見込みです。引き続き、コスト削減に努めてまいります。

## Q2 平成22年3月期の業績見通しについてお聞かせください。

平成22年3月期の業績予想については、収益基盤の確立を目指した事業計画の変更により、売上高680百万円(前年同期324百万円)と6期ぶりの増収の見込みです。また、損益については、営業損失373百万円(前年同期624百万円)、当期純損

失375百万円(前年同期634百万円)となる見込みで、経常損益ベースで6期連続の赤字幅縮小の見込みです。

## Q3 平成22年第2四半期累計期間の業績及び通期の見通しを修正されましたが、要因についてお聞かせください。

当第2四半期中は抗体事業およびその他事業は順調に推移しましたが、食品事業において、主要製品であるベビーリーフが、希にみる水害および日照不足の影響により生産量が大幅に減少し、それに伴い販売が伸び悩みました。その結果、2009年6月26日付に公表した予想数値を下回る結果となり、業績予想の修正に至りました。一方、利益については、売上高は当初予想を下回りましたが、管理部門人件費等の経費削減などに努めたことにより、経常利益及び四半期純利益ともに予想数値どおりでした。また、通期については、食品事業の売上回復(市場回復)の進捗の遅れから、売上高の減少の見通しとなりました。しかしながら、利益については、管理部門経費に加え食品事業の製造人件費、設備に係る経費削減をさらにすすめることにより、経常利益及び当期純利益ともに予想どおりの見込みです。

今後の対策としては、食品事業部門の生産管理体制の向上および生産効率の向上に取り組んでまいります。

## Q4 トランスジェニックの中長期的な企業戦略についてお聞かせください。

短期的には、遺伝子破壊マウス作製受託サービス、GANP<sup>®</sup>マウス技術により作製した市場性の高い抗体製品や試薬販売といった製品販売やサービス提供により収益を確保します。中長期的には、がんセンターなどの研究機関との共同研究から見いだしたバイオマーカー候補分子の抗体を、診断薬開発に展開し、ライセンス収入により、収益化を図ります。この一環で、尿中腫瘍マーカー開発では、当社初の診断薬の2年以内上市をめざしています。長期的には、自社開発抗体を医薬品に展開することをめざし、治療用抗体の研究プロジェクトをすすめています。将来的な、医薬品からのライセンス収入を期待しています。

以上のような事業展開で収益の確保、さらなる経費削減につとめ、3年以内の黒字化をめざします。

## Q5 新たに加わった食品事業の取り組みについてお聞かせください。

医療費の財政圧迫から医療行政の転換期に入り、特定健診制度が導入され、健康に対する個人の責任も重みが増えています。このように健康維持に対する個人の取り組みが求められる中、「予防医療」の概念の重要性が強く謳われ、個人の関心も高まっています。予防医療市場も拡大しており、特に「機能性食品」の需要は高まっています。一方、食の安全や偽装問題が最近頻発し、その対応も社会的に求められ、これらの検査体制の強化も求められています。そこで、食品事業においては、厳密な栄養分析を実施し「機能性食品」を提供するとともに、分析技術を活用し、機能性評価や安全評価等に取り組んでまいります。

## Q6 最後に、株主様へのメッセージをお願いいたします。

当社では、『早期黒字化の実現』を重要な課題と認識し、収益基盤の確立と生命資源の価値をビジネスに展開する研究開発をすすめています。業績向上のため、独自技術を基盤とした研究成果の収益還元促進を図りつつ、将来に向けて付加価値の高い研究開発に取り組めます。抗体事業においては、バイオマーカー探索が診断薬開発へとあらたなステージに入り、研究成果が収益に還元される段階になりました。

従来に加え、診断薬開発や機能性食品開発といった、皆さまの生活により近い分野で、経営理念である「人々の健康と豊かな暮らしの実現」を実践したいと考えています。

### ■ 各セグメントの取り組みをご紹介します。

#### 遺伝子破壊マウス事業

当社の独自技術である遺伝子トラップマウス作製技術により作製した遺伝子破壊マウスおよび遺伝子破壊ES細胞の情報を保有し、当社ホームページ上の『TG Resource Bank<sup>®</sup>』および国立遺伝学研究所のデータベースとして公開し、系統ごとに使用権を供与しています。また、研究者が標的とする遺伝子を破壊したマウスの作製受託や疾患モデルマウスの提供も収益の基盤となっています。特定の遺伝子を破壊したことにより現れる生体の変化を捉えることにより、疾患の原因遺伝子をつきとめることが可能となり、創薬研究や遺伝子機能の研究に役立っています。また、疾患モデルマウスとしては、体内時計の研究に活用される、日周期リズムが夜型にシフトしているクロックマウスを提供しています。近年、肥満など様々な疾患で、体内リズムの関与が指摘され、この疾患マウスのニーズが高まってきています。



▲ 遺伝子破壊マウス

#### 抗体事業

当社のGANP<sup>®</sup>マウス技術を用いて創薬ターゲットとして注目されているGPCRに対する抗体、がんや糖尿病といった市場性が期待される抗体を作製し提供しています。現在、当社の研究開発による提供抗体数は約600種類にのびます。これらの製品の評価を、国立がんセンターと連携して行ない、良質な抗体の提供につとめています。また、各研究機関から得られたバイオマーカー候補分子情報に基づき開発した抗体について、診断薬を目指して研究開発に取り組んでいます。尿中腫瘍マーカー、膵がんマーカーに引き続き、各種バイオマーカーの拡充につとめています（8ページ図「研究開発パイプラインの進捗状況」参照）。また、将来的な創薬に向けて、腹膜播種がんに対する治療用抗体の創出にも取り組んでいます。



▲ 開発抗体製品

#### 試薬販売事業

ライフサイエンス研究支援のための、研究用試薬販売および情報提供を展開しています。現在、当社の取扱品目数は、25,000種類です。特に、サイトカインについては、近年免疫療法が注目され、治療法の研究が盛んになっていることから、需要が伸びています。今後も、サイトカインを含めた研究用試薬の拡充につとめ、ライフサイエンスの支援をまいります。



▲ 研究用試薬

#### 食品事業

予防医学への貢献を目的として、機能性食品の開発および機能性評価を推進しています。栄養分析の検証によりミネラルおよびポリフェノールが豊富である有機栽培ベビーリーフ（発芽まもない若い野菜）を主力製品として展開しています。有機JAS認定された農場で生産・梱包され、さらに徹底したトレーサビリティでの品質管理体制により高い評価を得ており、全国百貨店、大手スーパーや生協などへ販路を拡大しています。また、機能性食品として開発された、甘夏ドレッシングとトマトドレッシングが「くまもと農工商連携100選」に2009年10月認定されました。今後も、機能性を検証した食品の開発に注力し、予防医学に貢献いたします。



▲ 有機栽培ベビーリーフ

#### その他事業

創薬支援の一環として、国内では入手がたいアルツハイマーやパーキンソン病の動物モデルでの薬剤評価システムを提供しています。特に、中枢神経系の医薬品開発に注力する製薬メーカーの需要が高まっています。

### Keywords キーワード

#### GANP<sup>®</sup>マウス技術

GANP (Germinal Center Associated Nuclear Protein)とは、熊本大学 阪口薫雄教授らにより発見された遺伝子で、抗体を産生するB細胞で発現しています。GANP<sup>®</sup>マウス技術とは、このGANP遺伝子を過剰に発現させたGANP<sup>®</sup>マウスを用いて抗体を作

製する技術です。GANP<sup>®</sup>マウスで得られる抗体は、親和性や特異性の高いことが特徴で、診断薬や抗体医薬の開発への展開が可能です。当社は、本技術による抗体の自社製品開発、および本技術のライセンス供与を行い、抗体事業収益の柱としています。

#### Gタンパク質共役型受容体 (GPCR, G-protein-coupled receptor)

生理活性物質という、ホルモンなどのからだの中で働きをもつ物質の多くは、細胞の表面に存在する受容体という受け皿に結合して働きます。この受容体は、細胞の外側から内側からの生理活性物質による刺激を受けとり、情報として利用できるように変換する仕組みを

持つタンパク質です。その中で、1本のタンパク質が細胞膜を7回繰り返し貫通する構造を特徴とするのがGタンパク質共役型受容体 (GPCR)です。ヒトには700~800のGPCRが存在するといわれていますが、そのほとんどが結合する生理活性物質もまたその働きも不明

です。GPCRは様々な疾患に関与しているといわれ、その対象疾患の領域は中枢神経系、内分泌系、循環器、呼吸器、泌尿器、消化器、生殖器など多岐にわたっています。その未知のGPCR群は、基礎研究のみならず創薬研究の標的となっています。

#### バイオマーカー

バイオマーカーとは、尿や血液などに含まれる生体由来の物質で、特定疾患の状態に応じて変化し、その疾患の指標となるものです。よく知られているものでは、健康診断などの臨床検査の測定項目となっている検査値（血糖、総コレステロール、

尿酸、GOT、GPT、γ-GTPなど）があります。これらバイオマーカーの測定により、疾患の診断や効率的な治療法の選択が可能となります。

#### 膵臓がん

膵臓がんは、膵臓に発生する癌です。初期が無症状であること、また膵臓そのものが体の奥にあることから、発見が困難であり、癌での死因の第5位となっています。現在の診断方法は、血中のCA19-9、CEA、CA50等の腫瘍マーカーの測定やCT等の画像診断が実施されています。

## 研究開発プロジェクト概要

短期的に収益の確保が可能な抗体製品のラインナップの拡充を図りつつ、中期目標として、大学や研究機関等から得られた情報に基づき、GANP<sup>®</sup>マウス技術により抗体を作製します。これらの抗体を、各種バイオマーカーとして、診断薬開発に展開しています。さらに、この研究開発の中長期的な目標として、将来的な創薬を目指して、治療用抗体の開発を進めています。

### 短期

#### 新規技術開発関連

- 利益率向上、GANP<sup>®</sup>マウス技術活用のため自社開発抗体シリーズのラインナップの充実。
- 抗体の性能評価に、国立がんセンターのスクリーニング系を活用し、製品付加価値を高める。

### 中期

#### 新規バイオマーカーの探索関連

- 大学・研究機関等で同定された新規バイオマーカー候補分子情報に基づき、GANP<sup>®</sup>マウス技術を用いて抗体を作製、バイオマーカーとしての有用性検証。
- 将来的に、バイオマーカーを診断薬に展開し、ライセンスフィー、マイルストーンフィーを獲得。

### 中長期

#### 創薬ターゲット探索関連

- 腹膜播種がん<sup>\*</sup>治療用抗体の開発。
- 将来的に、医薬品ライセンス収入を獲得。

※腹膜播種がん患死者数(胃がん、膵がん由来)年間約2万5千人。

## 研究開発に関するお問い合わせ トップ3

### Q1. 尿中がんマーカーの上市はいつ頃ですか？

(回答) 現在、大手診断薬メーカーにて、臨床試験(患者血液で診断薬となるか検証)が実施され、既に上市後の経済条件を定めたライセンス契約を締結(2008年7月)しています。具体的な上市時期は未定ですが、その後も上市に向けて順調に進捗しています。

### Q2. 新型インフルエンザ関連のリリースがありました。治療薬ですか？ピーク時に間に合うのですか？

(回答) 当社は、国立国際医療センターと「新型インフルエンザ簡易迅速診断方法」を開発することを目的として、本年7月に共同研究契約を締結しました。本研究は、診断薬の開発を目的としており、当社はGANP<sup>®</sup>マウス技術を用いて抗体の作製を担当しています。診断薬ですので、シーズンを通して、また恒常的に医療現場のニーズは高いものと見込んでいます。

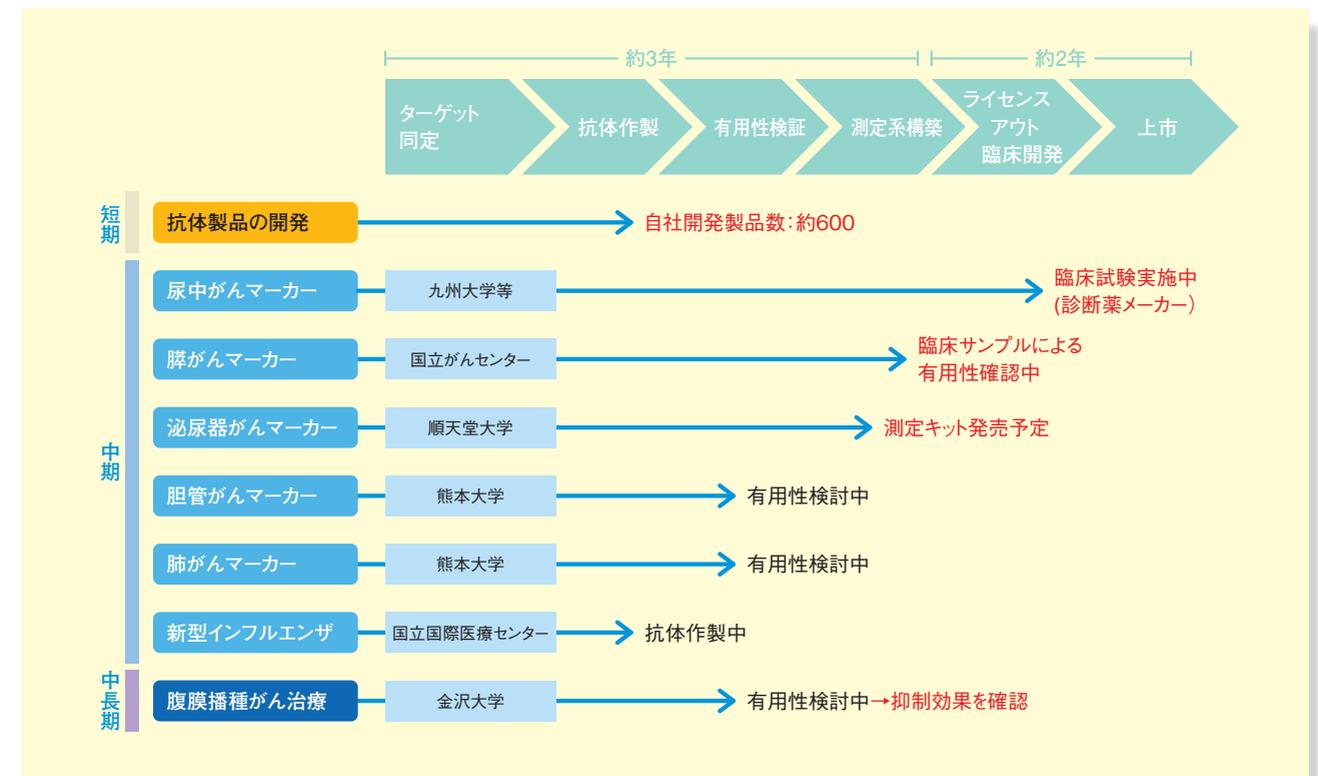
### Q3. 膵臓がんの抗体の特許が成立したとのことですが、今後の予定は？

(回答) 本年6月に、スーパー早期審査制度を活用し、特許が成立しました。その後も、国立がんセンターとの共同研究が順調に進捗し、良好な結果が得られています。現在、診断薬メーカーからも関心が寄せられ、診断薬開発に向けて順調に進捗しています。

## 研究開発パイプラインの進捗状況

当社は、GANP<sup>®</sup>マウス技術を用いて作製した抗体を様々なバイオマーカーとして、診断薬や治療用抗体へ展開すべく研究開発に取り組んでいます。

自社開発した抗ジアセチルスベルミン抗体による、尿中腫瘍マーカーの開発も臨床データの集積が順調に進捗し、診断薬として上市に向けて進行中です。また、膵がんマーカーに関しては、国立がんセンターとの共同での特許も成立し、診断薬メーカーからも注目され、ライセンスアウトへの準備をすすめています。GANP<sup>®</sup>マウス技術が認知されつつあるなか、各研究機関との共同研究を通じて、その他のバイオマーカーの拡充に積極的に取り組んでいます。



## 研究開発トピックス

<b>1月</b>	国立がんセンターとの共同研究契約締結(バイオマーカー探索) 科学技術振興機構の地域イノベーション創出総合支援事業課題採択
<b>2月</b>	『新規胆管癌マーカーに対する抗体ならびにその診断応用』特許出願 『GANP <sup>®</sup> マウス技術』特許が豪州にて成立
<b>4月</b>	『GANP <sup>®</sup> マウス技術』特許が欧州にて成立
<b>5月</b>	第6回GPCR研究会にてランチョンセミナー開催 第56回日本実験動物学会総会にて成果を発表
<b>6月</b>	『新規膵臓癌マーカーに対する抗体ならびにその診断応用』特許が国内で成立 自社開発抗GPCR抗体の発売開始
<b>7月</b>	国立国際医療センターとの共同研究開発契約締結(新型インフルエンザ抗体) 日本ヒトプロテオーム機構第7回大会にて成果を発表
<b>9月</b>	自社開発AGEs測定キット発売開始
<b>10月</b>	ヒューマンサイエンス振興財団とのライセンス契約締結(膵臓癌マーカー関連) 第66回日本癌学会学術総会にて成果を発表 第82回日本生化学会大会にて成果を発表
<b>11月</b>	自社開発CD147測定キット発売開始

## 当社事業の社会還元

当社の代表的な製品である遺伝子破壊マウスがどのように活かされているかご紹介いたします。

生体は、ある特定の遺伝子が破壊されると、何らかの変化を示し、それが疾患につながる場合があります。その疾患の原因となる遺伝子を探ることが治療薬の開発につながることから、製薬メーカーは特定の遺伝子を破壊した動物を研究ツールとして活用しています。このような研究分野において、当社が提供する遺伝子破壊マウスの一つに、統合失調症の原因遺伝子の特定に役立つ例があります。当社が大手製薬メーカーの依頼で作製した遺伝子破壊マウスに、脳の大きさが変化したり、統合失調症に似た行動を現す変化が認められたのです。このことから、その遺伝子が統合失調症の原因遺伝子である可能性が認められ、現在、精力的に研究が進められています。このように、遺伝子破壊マウスは、疾患の原因遺伝子の追求に役立ち、医学の進歩に貢献しています。

## 連結財務諸表

### 連結貸借対照表

(単位:千円)

科目	前連結会計年度 (2009年3月31日現在)	当第2四半期 連結会計期間末 (2009年9月30日現在)
<b>(資産の部)</b>		
流動資産	1,513,240	1,338,866
固定資産	721,458	861,535
有形固定資産	338,483	368,148
無形固定資産	187,563	409,165
投資その他の資産	195,412	84,221
<b>資産合計</b>	<b>2,234,699</b>	<b>2,200,402</b>
<b>(負債の部)</b>		
流動負債	114,421	153,274
固定負債	5,351	127,762
<b>負債合計</b>	<b>119,773</b>	<b>281,036</b>
<b>(純資産の部)</b>		
株主資本	2,095,253	1,905,407
資本金	4,855,225	4,855,225
利益剰余金	△2,758,189	△2,948,035
自己株式	△1,782	△1,782
評価・換算差額等	—	1,451
その他有価証券評価差額金	—	1,451
新株予約権	17,387	8,634
少数株主持分	2,285	3,871
<b>純資産合計</b>	<b>2,114,926</b>	<b>1,919,365</b>
<b>負債純資産合計</b>	<b>2,234,699</b>	<b>2,200,402</b>

### 連結損益計算書

(単位:千円)

科目	前第2四半期 連結累計期間 (2008年4月1日から 2008年9月30日まで)	当第2四半期 連結累計期間 (2009年4月1日から 2009年9月30日まで)
売上高	134,542	243,550
売上原価	76,749	139,330
<b>売上総利益</b>	<b>57,792</b>	<b>104,219</b>
販売費及び一般管理費	370,668	319,401
<b>営業損失</b>	<b>312,875</b>	<b>215,182</b>
営業外収益	7,383	11,198
営業外費用	1,716	19,970
<b>経常損失</b>	<b>307,207</b>	<b>223,954</b>
特別利益	—	11,164
特別損失	4,923	21,627
<b>税金等調整前四半期純損失</b>	<b>312,130</b>	<b>234,416</b>
法人税、住民税及び事業税	1,678	2,427
少数株主損失	13	46,998
<b>四半期純損失</b>	<b>313,795</b>	<b>189,845</b>

### 連結キャッシュ・フロー計算書

(単位:千円)

区分	前第2四半期 連結累計期間 (2008年4月1日から 2008年9月30日まで)	当第2四半期 連結累計期間 (2009年4月1日から 2009年9月30日まで)
営業活動によるキャッシュ・フロー	△373,751	△214,895
投資活動によるキャッシュ・フロー	597,754	△135,944
財務活動によるキャッシュ・フロー	—	△14,314
現金及び現金同等物に係る換算差額	△89	△0
現金及び現金同等物の増減額(減少:△)	223,913	△365,153
現金及び現金同等物の期首残高	1,496,591	1,378,300
新規連結に伴う現金及び現金同等物の増加額	—	141,185
現金及び現金同等物の四半期残高	1,720,505	1,154,332

## ■ 会社概要 2009年9月30日現在

会社名	株式会社トランスジェニック
設立	1998年4月
資本金	4,855百万円
従業員数	36名
事業所	
本社	熊本市南熊本三丁目14番3号
神戸研究所	神戸市中央区港島南町七丁目1番地14
東京オフィス	東京都中央区京橋三丁目9番2号

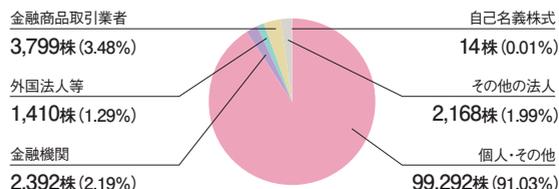
## ■ 株式の状況 2009年9月30日現在

発行可能株式総数	436,301株
発行済株式の総数	109,075株
株主数	11,636名

### 大株主の状況

株主名	持株数(株)	議決権比率(%)
井出 剛	2,580	2.20
松井証券株式会社	1,357	1.15
日本生命保険相互会社	1,350	1.15
村田 英造	1,203	1.02
野村證券株式会社	1,171	1.00
上永 智臣	905	0.77
佐賀 芳行	800	0.68
中村 英幸	722	0.61
張本 理恵	720	0.61
大阪証券金融株式会社	718	0.61

### 所有者別株式分布状況



## 役員 2009年9月30日現在

代表取締役社長	山村 研一
取締役	福永 健司
取締役	能勢 博
取締役	井出 剛
常勤監査役	増岡 通夫
監査役	遠藤 了
監査役	佐藤 貴夫

## 株主メモ

証券コード	2342
上場市場	東京証券取引所 マザーズ
上場年月日	2002年12月10日
事業年度	毎年4月1日から翌年3月31日まで
定時株主総会	毎年6月
基準日	定時株主総会・期末配当 毎年3月31日 中間配当 毎年9月30日
株主名簿管理人 特別口座の口座管理機関	三菱UFJ信託銀行株式会社
同連絡先	三菱UFJ信託銀行株式会社 証券代行部 〒137-8081 東京都江東区東砂七丁目10番11号 TEL:0120-232-711(通話料無料)
公告方法	電子公告(当社ホームページに掲載) ※事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載して行います。

## IRからのお知らせ

当社の最新トピックスやホームページの更新情報などを電子メールでお知らせしています。ご登録は当社ホームページにて受け付けています。

<http://www.transgenic.co.jp/jp/ir/index.html>

当社のIR活動についてご意見・ご感想をお聴かせください。

下記アドレスへのご連絡をお待ちしております。

[ir@transgenic.co.jp](mailto:ir@transgenic.co.jp)